



ご挨拶

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第三十八号

2023/09/27 発行

題字：高橋弘美

連日三十度超えの世界からようやく抜け出して、かなり涼しくなった。あの連日の猛暑がうそのように秋が来て、どうやら無事稲刈りの季節を迎えられたようである。

わたしの中で、秋は稲わらの匂いと強く結びついている。この時期はどこもかしこも稲わらの匂いがするが、この匂いを嗅ぐと、むやみに子どもころのことなど思い出してしまう。昔、田んぼの隅に小さく積まれた稲わらの上に、優しく受け止めてもらうことを期待して飛び乗ったところが、受け止められるどころか大穴を開けて落っこちてしまったことがある。近所の子がそうしているのを見たので真似したのだが、子どもだって体の重さは人によるので、この出来事でわたしは自分の体の重さというものを決定的に思い知らされたような気がしたものである。愚鈍な人間の根底にあるのは、多くこうした経験の積み重ねのような気がするが、ではこの手の人間は決して軽やかで美しいものになれないかという、そう冷淡な話でもないように思うのだ。法則は人を差別しないが、自分の感情が差別的なのである。

今号の内容

月の思惑

後記に代えて

月の思惑

突然だが、今年のはじめに一度削除していたブログをもとに戻した。

厳密にはまったくもとに戻ったわけではなく、ブログとして機能を限定して戻した。以前の記事も復元できるものは復元してある。ご覧になりたい方は[こちら](#)が新しいブログ。デザインは現在のウェブサイトに合わせてあり、過去のひとり雑誌に掲載したもののいくつかを、「セレクション」として記事にして載せてある。

ウェブサイトの運営方法はいくつもあるが、ブログを手動で作成して更新するとなると、やはりいろいろと煩雑な面が多く、少しなにか書きたいと思っても、更新するまでの手間が多くてやめてしまうというようなことが何度かあった。それ自体は些細なことだが、この些細なことの積み重ねが結構な差を生むのではないかと思っ、自分にとって一番快適に書ける運営方法とはなにかを考えた結果、ワードプレスによるブログ運営に戻し

たようなところがある。

[この記事](#)にも少し書いたが、ウェブサイト運営は結局自分がなにをしたいかをよく考えて、そのときそのときに最適な方法を採用よりほかないと思うのだが、わたしの場合、この「なにをしたいか」の部分が時期によって大きく変わる。今回気がついたことだが、わたしは心理的に外に向かって開く時期と、うちにこもって閉じる時期とを比較的ゆるやかな周期でくり返していて、今年はじめにブログを削除したころには、どうやら内閉する時期に当たっていたようである。

この時期になると、夜間に城下町の門という門が番兵の手によって固く閉ざされてしまうように、徹底して門を閉じたくなる。城は星の下でまどろみ、町の人たちもみな眠りにつく。こんなときに目を覚ましてるのは、月を眺め星を眺めて無聊を慰める孤独な者か、憂いを抱えた者か、ともかくなにか人生の投げかけてくる青白い悲しみに浸っている者だ。この者が窓辺にかかる月を眺めながら、寝床の上で膝を抱えてつらつらもの思っている、あたりは青く静かで、夜が更けてくるにつれ番兵もついうつらうつらしてくる、月は静かに西へ動いてゆき、やがてこの孤独な人の窓辺から離れかかる。

その動きにつられて、この人は自分もつい外へ

出てゆく。通りの家の窓という窓はぴたりと閉まっており、物音ひとつしない。青白い月に照らされた自分の影が、いやにくつきりと浮かび上がり、自分の動くのに合わせて動きまわる。それを見てこの人は考える……影のやつ、こんなに生き生きしている。こんなにはつきり輪郭をもって、こんなに鮮やかに地面の上で踊っている。ほんとはこっちが自分じゃないのかしら。自分が生きているのが間違いで、この影が生きているのがほんとはじゃないかしら。どうもわからなくなってきた……。

ところでこの孤独な人は、孤独な人の常で、町の隅々をよく見ている。この人に友だちはないし、親しく挨拶したり、話しこんだりするような隣人もない。この人はいつもひとりで、自分が世界ののけ者のような気がして、あるいはどうしてもそこへ入りこめないような気がしているものだから、人々が笑ったりおしゃべりしたりして交流しているのを、働いたり洗濯したり怒って子どもを追っかけ回したりしているのを、ただ眺めている。そしてまたあれこれ考えながら、城壁を手で触りながら歩いてみたり、子どもたちがわっとどこかへ駆けてゆくのをぼんやり目で追ってみたりする。

この人にとって、世界は体験するものというより見るものである。この人はそこへ入ってゆくすべを知らないし、自分が半分透明な、ほとんど存

在していないもののような気がする。町角を歩いていて、ひよいと誰かに声をかけられようものなら、この人はひどく驚き、なぜあの人は自分を知っているのだろうと思う。そしてそれを嬉しく思う反面、相手に自分を知られていることにおそれおののいて、その場から逃げるように立ち去ってしまう。

「な？ 云っただろ、あいつはただ恥ずかしがり屋なだけなんだよ」

「いや、そうじゃないよ。ありや少し頭がおかしいんだ。きつと少し足りないんだよ」

「足りないかどうかは知らないが、変なやつだよ。あいつ、なんて名前だったかな。どこに住んでいるんだ？」

このような会話を背中に聞きながら、この人は自分の存在が人の会話にのぼってしまったことが無性に恥ずかしくて、なぜみんな自分を放っておいてくれないのだろうと思う。そのくせこの人はいつも、こだわりなく人と友だちになり、互いに肩を組んだり笑いあったりする人たちのことを、軽蔑と憧れの奇妙に入り交じった気持ちで見ているのである。そして自分に声をかけてきた、自分がただ恥ずかしがり屋なただだと弁護してくれた、あの人と一度親しく話してみたい、あの人なら自分をわかってくれるのではないかなどと、そんなふうに思うけれども、結局はそれもまた幻滅に終

わりするような気がして、思いきって声をかけてみようという気持ちもくじけてしまうのである。

そんなようなことをつらつら思い出しながら、この人はひと気のない夜の町を歩き、番兵の目をかいくぐって、城壁の崩れたところへやってきた。そこはなにかの折に壁の一部が崩れてしまつて、一時しのぎに石を積み上げてそれらしく繕つてある。だがいたずらな子どもたちが毎日やってきて集中砲火を浴びせた結果、ついに石は解体されてしまい、子どもたちは崩れた壁の割れ目から悠悠と外へ出られるようになった。その子どもたちの中にひどく頭の回る子がいて、外へ出て行くときには必ず見張り役を置き、また外で好き放題遊んだあとは、ふたたびみんなに指図して石を元通りそれらしく積んでおく。そこは町はずれで、あまり人通りもないようなところだから、例の孤独な人を除いて、誰も子どもたちのこうした遊びを見ている者はなかった。

いまこの孤独な人は、月明かりに導かれ、その城壁の崩れたところへやってきた。そして子どもたちの手で積み上げられた石をしげしげと眺めた。

この人は日ごろあまり城壁の外へ出なかつた。自分の目でよく見えていて、足で確かに歩ける範囲だけを歩くのがこの人の日課だった。堅牢な壁に守られた町の外へ出てゆくなど、この人にはまったく考えも及ばぬことだった。だがこの人は

なぜかこの夜、少しずつ西へ傾いてゆく月に誘われるようにここへやってきて、積み上がった石をひとつずつどかし、現れた小さな割れ目に首をつっこみ体をよじり、苦勞して外へ出たのである。

空が急に開けた。月がこんな広大な空を独り占めしているのであることを、この人は生まれてはじめて知った。この人は四方を見渡してみた。そしてその空の広さ、大地の広がりには驚いた。この広い地の隅々を、月はくまなく照らし、太陽もぬかりなく照らし温めている……そのことにこの人は嘆息した。ごみごみした町と違って、あたりには建物もなく、風は誰にも邪魔されずにのびのびと吹き渡っていた。その人は実に久方ぶりに、胸を開いて思いきり空気を吸いこんだ。

夜の鳥が、なにか薄気味の悪い声で鳴いた。その人はその声にぎくりとし、急に怖気づいて、思わず壁の中へ引き返そうとしたが、そのとき城壁の近くに、一本の古い樫の木があるのが目にとまった。その肌はごつごつして、しわだらけの年寄りの肌のようなだった。その人は子どものころから引つ込み思案で、人に甘えることもできず、かわいげのない子だと云われていたが、近所に住む祖父だけは、その人をなぜかわいがってくれた。その平べったくて大きな手のことを、その人は急に思い出し、その手を求めるように、その人は樫の木に触れた。ざらついでこぼこ隆起した、古

木の肌に触れると、不思議と気持ちが落ちついた。その人は顔を上げて自分を誘い出した月を見、それから広々と開けた世界を見、髪を風に揺すられながら、長いことそのままあたりを見つめていた。

明け方近く、なにか考えこむような顔をしながら、家へ戻るその人の姿があった。その人は寢床へもぐりこみ、横になって目を閉じた。夜はもう明けつつあった。眠りは浅く、短いものになりそうだった。だがその人はそれを、この一夜の冒険を、決して悔いてはいなかった。

この孤独な人が、自分の城下町から本格的に出でゆくかどうか、そんな必要があるかどうか、わたしは知らない。この人にとって、偶然城壁の破れ目から外へ出た、そのことだけですでに、十分以上の価値があることだろう。このような人は、こうした非常に小さな経験を、大きく広げる才に恵まれている。子どもはみなこうした才能の持ち主だが、なぜか多くの人は大人になるにつれ、この能力を衰退させてしまうようである。

この孤独な人が、月に導かれ城壁の外を見た、ちようどそのような時期が来ると、わたしもまた壁の向こうが見たくなり、壁の向こうへ出る破れ目を探しはじめる。インターネットはわたしにとって、その破れ目のような役目を果たしている

ように思われる。孤独な人が家の外へすら出る必要を感じず、寢床の上でつらつらもの思いしながら過ぎすとき、わたしもまた窓を閉めて家の戸に鍵をかけ、つらつらのもの思いのさせるに任せる。そのもの思いは非常に長いこと続くこともあり、それほどでもないときもあるが、もの思いがもう十分もの思いしたと思うときか、あるいはもの思いする種の尽きたときか、それはわからないが、ともかくある夜、月が親しげに窓辺にかかり、思わせぶりの様子で身を引いてゆく、それに焦がれるようにわたしは外へ出る。そのときわたしはこの世に自分を置いておく場所の必要なことを痛感する。

世に自分を置いておく場所が、すなわち職業や身分や肩書きを意味する時代が長く続いた。それはこの現代においてもなおあまり変わらないのかもしれないが、しかし思春期からインターネットとともに育ってきた人間には、この架空の空間が自分を置いておく場所としてふさわしいもののように思える。

それはもちろん実体をともなった場所ではない。職業や身分のように確固とした現実を支えられたものではないかもしれないが、しかしこのインターネットの世界もまた、ある意味では否定しよらない現実である。ここに自分を置いておくことが、このような現実でもあり非現実的でもある

ような中間の場所があることが、この孤独な人のような人にはちようどよいことがある。

この孤独な人が、自分の足で世界を歩く日が来るかどうかはわからない。もしかすると、ある日が自分を追いかけてくるようにとこの人をいぎなうのかもしれない、その月が思いがけなくこの世の裏側までこの人を案内することがあるかもしれない。だがそれはそうした運命の動くときが来なければわからないことだし、そういうことはある意味月の思惑であり、人の思惑ではない。しかも人は月に誘われたとき、断ることのできる権利を有してもいる。もしも月の優しい笑みに心を動かされないのなら、その人は平気で月の誘いを断るだろう。

この孤独な人をめぐる内閉と開示の揺れ動きは、なにか月の満ち欠けに似ている。それ自身が一定の周期を、ひとつのリズムをもつ自然の摂理に似ている。その周期やリズムのことを、それ自身を、ひとつの生理現象のように、ひとつの生き物のように、尊重したい気分が自分にある。この満ち欠けに抗わず素直に従っているとき、月はわたしを自分に属するものとみなして、微笑みかけてくれるような気がするのである。

あとがきに代えて

急なことだが来月東京へ行くことにした。久々に教会へ行くためである。

今年の八月に、日本正教会のトップである府主教が亡くなった。来月の二十二日に、その後任が正式に着任する着座式というのがある。一生にそう何度もありそうな儀式ではないから、どんなものか一度見ておこうと思っただ次第である。

田舎へ帰ってきて一年半ほどになるが、この間まるで教会と無縁で来たので、いまさらのこの行くのも妙な気もする。が、だからといってかたくなに関係しないというのも違うような気もする。結局、わたしはキリスト教を奉ずるには精神的束縛を嫌いすぎ、かつ東洋人すぎることがわかったけれども、この現在のわたしから改めて神というものを見てみると、不思議とそこに以前よりも親しみのある存在が見えるような気がする。

神とはなにか、教会が決めるという時代はもう終わってしまったし、おそらく永久に戻ってこない。教会に決めてもらえば、確かにある意味で楽には違いないが、そういう信仰に満足できるかどうかは人による。わたしのように社会的なものとはほとんど無縁で生きていけると、結局、単に信仰する個人がいるだけで、神とはなにかも人によって

違うのだという結論に達せざるを得ない。

キリスト教はキリストを信じる者の共同体である。これがこの宗教の最大の強みであり、同時に最大の弱みということにもなりそう。この共同体というものは、かつてわたしの夢想するものであったし、その夢想はいまも完全に破られてはいない。しかしどんな共同体を夢見ようと、どんな仲間を夢見ようと、わたしはすぐにその共同体からはみ出た自分を自覚せざるを得ない。共同体の夢を見るのもわたしが、共同体に完全に絡めとられることのできない自分もまた、まぎれもなく自分である。

結局わたしはどこまでいっても、ひとりではなげばなにもできない。誰かとなにかをするのを夢見るのは社会的なわたしが、その社会的なわたしのすぐ脇に、否でも応でもひとり人里離れたところへ向かおうとする自分がいる。

月の思惑に従うことは、この相反する自分の満ちたり欠けたりするのを、ひとつの大きな流れのようなものとしてとらえ、許容してゆくことであるような気もする。キリスト教は、そうしたことを理解するためにどうしてもぐり抜けねばならなかった、ひとつの通過儀礼のような側面もあったかもしれない。



George Frederick Watts : Dweller Within

二〇二三年九月二十七日
水澤雪下
<https://mjibms.com/>